

慈雲

第 56 号

2020/12

真宗大谷派 慈雲山 瑞蓮寺

慈雲会

〒604-8214

京都市中京区新町通蛸薬師下る

百足屋町3 7 5 番地

TEL/FAX (075)221-4616

zui renji@hotmail.com

http://www.zui renji.net/

Shinshū Ōtani-ha

Jiunzan Zui renji

Jiunkai



時 韋提希
白 佛言世尊
是 諸佛土
雖 復清淨
皆 有光明

時に韋提希（いだいけ）、仏に白（もう）して言（もう）さく、「世尊、このもろもろの仏土、また清浄にしてみな光明ありといえども、

【『観経』の言葉】

インドに実在したマ
ガダ国の妃韋提希夫人
は夫の国王のビンバシ
ヤラを息子のアジャセ
によつて幽閉され殺さ
れました。いわゆる王舎
城の悲劇です。さらにア
ジャセは母である韋提
希をも殺そうとしまし
たが大臣の諫めにより
思いとどまり、王宮の奥
深くに幽閉しました。苦
しみ悩む韋提希夫人は
必死の思いで霊鷲山に
おられるお釈迦さまに
救いを求めました。

やがて幽閉されてい
る夫人の前に現れたお
釈迦さまに対して韋提
希夫人は、「これ以上苦
しみの多い世界に居り
たくありません。憂い悩
みのない世界へ行きた
いのです。どうかそのよ
うな世界を教えてください
さい。」と懇願します。そ
れに対してお釈迦さま
は黙ってご自身の眉間
から光を放たれるので
した。（裏に続く）

【『観経』の言葉】(表面)の学び

お釈迦さまの眉間から出た光は、諸仏の国々を照らしました。お釈迦さまの頭頂に戻ってそこに台形を作りしました。そしてその中に韋提希夫人が求める「憂い悩みのない世界」である諸仏の国をひとつひとつお見せになりました。それらの諸仏の国々はどれも清らかで輝いておりました。

この一段は「光台現国」と名付けられています。それに対して夫人がお釈迦さまに対して答えたのが今月の表紙の言葉です。

この段落は「いえど雖も」で終わっています。後にまだ文が続くのですが善導大師はここでこの段落を区切っています。何故なのでしょう。含みをもった言い方です。輝いていると言いながらもこれらの諸仏の国々は満足しなかったのでしょうか。經典の続きを見てみましょう。

我いま極樂世界の阿弥陀仏の所みもとに生まれんと樂ながう。

とあります。韋提希夫人はお釈迦さ

まにひとつひとつ見せていただいた諸仏の国々の中から一つを選ぶことはしなかったのです。「これらの国々は皆すばらしいですが、私はいま阿弥陀仏の極樂世界に生まれたいです」と願ったのです。

阿弥陀仏の浄土とはいったい何でしょう。光あふれる素晴らしい諸仏の国とはどのように違うのでしょうか。善導大師はこの一段を「かんか感荷ぶつとん仏恩」と名付けています。仏さまの恩を心に深く感ずる、ということですから。そしてこれら諸仏の国々は素晴らしいけれども極樂世界とはまったく比べられないほどの違いがある、というのです。

仏さまのお心を推し量ることはできません。また、韋提希夫人の心境を察することも容易ではありません。しかし、善導大師の解釈が残されていますのでそれをもとに考えていきます。

ここは韋提希夫人が仏恩を感じたところ、とあります。言いかえたら夫人の心にお釈迦さまの心が届いたということ。お釈迦さまの身業

説法である「光台現国」を通して夫人は自分に願ひ続け呼び続けてくれるものがあることに気がついたのです。これまでは夫人の方から願うばかりであったのが、自分に願ひかけているものに初めて目が覚めたのです。お釈迦さまがお見せになった素晴らしい諸仏の国々はいいかえたら理想の国であり、韋提希夫人の思いに沿ったものであります。しかしお釈迦さまの本心はこれらの国々にはないと気づいた夫人は「いえど雖も」と言ったのです。そこではすでに夫人の心の中ではつきりと願うべき世界が見つかったことになりました。ですから善導大師は感荷ぶつとん仏恩と科名したので。夫人は自分の心の中に動き始めたもの、初めて灯った灯りを感じたことでしょう。お釈迦さまは「それを選びなさい」とは言われませんが確かにこれこそがお釈迦さまの本心かなうものだと分かった。これは確かに夫人の心に起こったものですがそれが何かまだはつきりとはからない。それで夫人はお釈迦さまにその阿弥陀仏の極樂世界を尋ねるのです。

仏事あれこれ

日常で、私たちが使う仏具の成り立ちやお荘厳の作法についてお話させていただきます。第一回目は蠟燭立（ろうそくたて）として飾られる鶴亀（つるかめ）についてです。



香炉（こうろ）、花瓶（かひん）、鶴亀を三具足（みつぐそく）と称しそれぞれ香（こう）、華（はな）、灯（あかり）をお供えするための仏具で、大谷派のお内仏には欠かせないものです。

「鶴は千年、亀は万年」という言葉にもあるように長寿を表すものです。これは、私たちの長寿を願うためのものではなく、阿弥陀仏の本願が私たちの中に生き続けていることを表したものです。

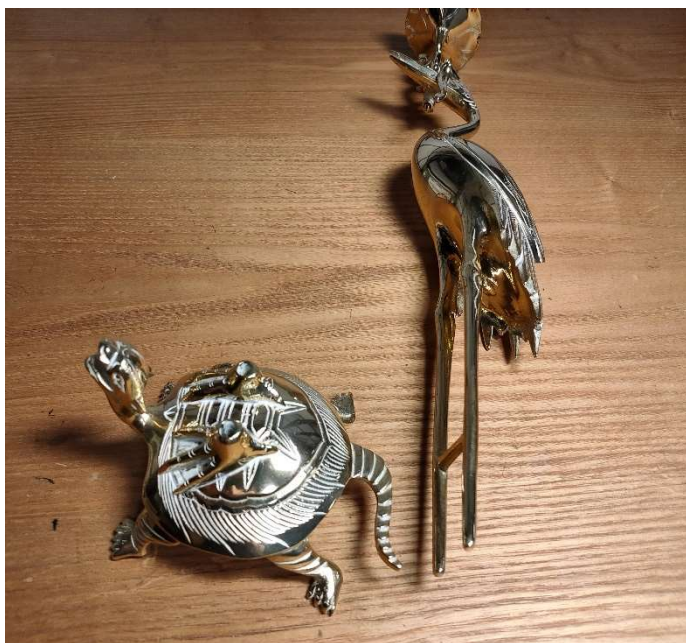


また、お飾りの作法としては上部の写真のようにお内仏（ないぶつ）を正面にして右側に置き、鶴亀の顔が左を向くように飾ります。鶴の口部分にある蓮軸（れんじく）は蓮の実、蕾、葉があり、それぞれ現在、過去、未来を

表しており、現在を表す実を正面に向けてます。

平生は朱色の木蠟（もくろう）をお供えして、朝夕のお勤めの際には白蠟を点します。一周忌以降の法要時には朱蠟を点しますが、朱蠟の場合は火が高く上がるのでお内仏上部の焦げ付きにご注意ください。

ちなみに鶴と亀は左図のように離れるのですが鶴の足先は亀の甲羅部分に付いています。はじめは違和感がありましたますがすぐに慣れました。（若院）



ご報告

去る十一月八日に報恩講並びに帰敬式を執り行いました。コロナ禍の中でしたがソーシャルディスタンスを考慮して無事に厳修することができました。(左写真)



また帰敬式には七人のお申し込みがあり、当日は六人の方が本堂で受式し法名を授けさせていただきました。左写真は法名伝達しているところです。



報恩講と帰敬式の様子はYouTubeで見ることが出来ます。「慈雲山瑞蓮寺」で検索してください。また瑞蓮寺のホームページからも閲覧できます。

編集後記

今年には新型コロナに振り回された一年でした。思い通りにいかないことが続く中、それでも例年でしたら気づかなかったであろうこともいろいろと経験しました。先日『翻訳できない世界のことば』(創元社)という本を買いました。世界には他言語に翻訳できない言葉がたくさんあります。その国独自の文化に根差したもののなのでしょう。日本語からは「こもれび」「ボケつと」「わびさび」などが選ばれています。私は「お蔭様」という言葉も翻訳しにくい言葉の一つではないかと思えます。日常で「おかげさまで元気にやっています。」などと挨拶代わりに使っています。ですが実はとても意味の深い言葉です。本来、自分にとって都合の良いことがあった時に使うだけではなく、都合の悪いことが起こった時にも同様に「お蔭様」は働いているのです。現実ではなかなかその様な時に「おかげさまで」とは言えませんが、年数を経て振り返った時に、きっと「あの事があったからだなあ」といえる時が来るかもしれません。